

子ども食堂 広がる善意

貧困問題が背景

「十分な栄養を」県内62か所

地域の子どもらに無料や低価格で食事を提供する「子ども食堂」が県内で急増し、阪神地域でも25か所で開かれている。子どもの6人に1人が貧困世帯で暮らすとされる中、栄養バランスのとれた食事を、みんなで楽しめる貴重な場所だ。特に尼崎市内は11か所と多く、市ことも政策課では「子どもの育ちに関わる市民が増えるのはありがたいと、情報提供などの側面支援をしていきたい」としている。(脇孝之)

県生活支援課によると、3か所)だったが、今年同子ども食堂は昨年3月末期には62か所(同25か所)で、県内4か所(阪神地域)に急増。阪神地域の内訳は、

尼崎市11、宝塚市5、西宮市4、伊丹市3、川西市2となっている。

背景にあるのは、平均的な所得の半分以下で暮らす「貧困世帯」の存在。厚生労働省の2012年の調査で、18歳未満の16・3%がこうした世帯で暮らし、6人に1人が貧困に直面しているとされた。

尼崎市ことも政策課によ

ると、市内で子ども食堂が初めて出来たのは2015年6月。小田地区の住民数人が「十分に食事が取れない子どもがいる」と同課に相談に訪れ、同市金葉寺町の特別養護老人ホーム「喜楽苑」で月1回開き始めた。その後、園田地区を中心に次々と誕生。阪神地区の約半数が同市に集中していることについて、同課では「尼崎は近所付き合いや自治会活動が活発で、地域で子どもの面倒をみる雰囲気が残っているからでは」と分析している。



手作りの料理を食べる子どもたちに話しかける吹野さん(左、尼崎市で)

地域協力も続く赤字 尼崎

毎週水、土曜日に開かれる尼崎市上坂部の子ども食堂には、いつも多くの子どもたちが集まる。

昨年2月、元市立保育園職員で一般社団法人「ポノプレイス」代表理事の吹野加代さん(59)が自費で開設。「子どもたちがコンビニでご飯を買い、自宅で一人で食べていると知り、放っておけなかった」という。

電器店だった木造2階建ての建物(延べ約90平方メートル)を改装し、1階に机や漫画などを置いた多目的室、2階に台所と14人が一度に食事できる食堂を設けた。

食事は子ども100円、大人300円で、有償ボランティアが作る。J A兵庫六甲から売れ残りの野菜をもらったり、近所の人から米を提供してくれたりするが、赤字が続く。

ある水曜日のメニューは▽カブの鶏そぼろあんかけ▽レタスのカツオたたきサラダ▽フルーツ——など5品。その日、やって来た子ども17人は午後6時頃に夕食が出来ると、順番に2階に上がって食べ始めた。

フルーツをお代わりする子どもや苦手のサラダを残す子ども……。みんな楽しそうに、食卓を囲む。市立園田南小の6年女兒は「フルーツが楽しみ。今日もおいしかった」と笑顔を見せた。